門松名稱

〔倭訓栞前編六〕かどまつ　正月門ごとに松竹など立て祝ふを、門松と稱せり、門神の祀なるべし、徒然草に、大路に松立わたしと見えたり、全浙兵制、我邦正月の事に、以松柏插門、乃取長春之好といへり、爲尹歌に、

今朝はまた都の手ぶり引かへて千色の始め（千色の始め、爲尹卿千首和歌作ちひろのみしめ、）

玄づが門松、歳華紀麗に、元日松標高戸、とも、董勛問禮に、繫松枝于戸、とも、風俗記に、正旦楚人上松柏類、ともいへり、其意近し、今福閩の間、正月門戸に松竹を飾り立るは、國姓爺より始るよし、西川氏の書に見えたり、禁中幷に堂上には、門松をかざる事なし、諸家中に注連をひく事あり、

〔世諺問答〕正月　問て云、一月より玄づが家ゐに、門の松とてたて侍るは、いつごろよりはじまれる事ぞや、答、いつごろとは、たしかに申がたし、門の松たつる事は、むかしよりありきたれる事なるべし、玄づが家居は、大かた封戸なるによつて民戸と申侍れど、むかしは一町のうちを五丈づゝにわりて、門をたてしかば、八の門ありしなり、その中に、賤が家ゐをつくり侍れば、門なかるべきにあらず、その門の前に松竹を立侍り、松は千とせをちぎり、竹はよろづ代をちぎる草木なれば、年のはじめの祝事にたて侍るべし、また玄だゆづり葉は、深山にありて、露霜にも玄をれぬ物なれば、玄め繩にかざりて、同じくひき侍るにや、玄め繩といふ物は、左繩によりて、繩のはしをそろへぬ物也、左は清淨なるいはれ也、端を揃へぬは、すなほなる心なり、されば、あまてるおほん神の天の磐戸を出で給ひし時、玄りくめ繩とてひかれたるは、今の玄め繩也、淨不淨をわかつにより、て、神事の時は必ひく事に侍り、賤が家ゐにひく事も、正月の神をいはひまつる心だてなるべし、

〔古今要覽稿時令〕かどまつ門松　玄めなは注連繩　正月の門松はふるき世より、その說さまざまあれど、いづれもたしかならず、ものにみえたるは、本朝無題詩、惟宗孝言の詩の自注に、近來世俗皆